

アジア史講座

第 4 卷

監 修 京都大学教授 田 村 実 造

北アジア史

先史時代の北アジア
古代遊牧国家の時代
征服王朝の時代
元朝崩壊後の北アジア
清代の北アジア
北アジアの近代化
附・チベットの歴史
中央アジアの歴史

岩 崎 書 店

アジア史講座 4

北アジア史

京都大学教授
監修 田村実造

岩崎書店

アジア史講座 第4巻 北アジア史

検
印
廃
止



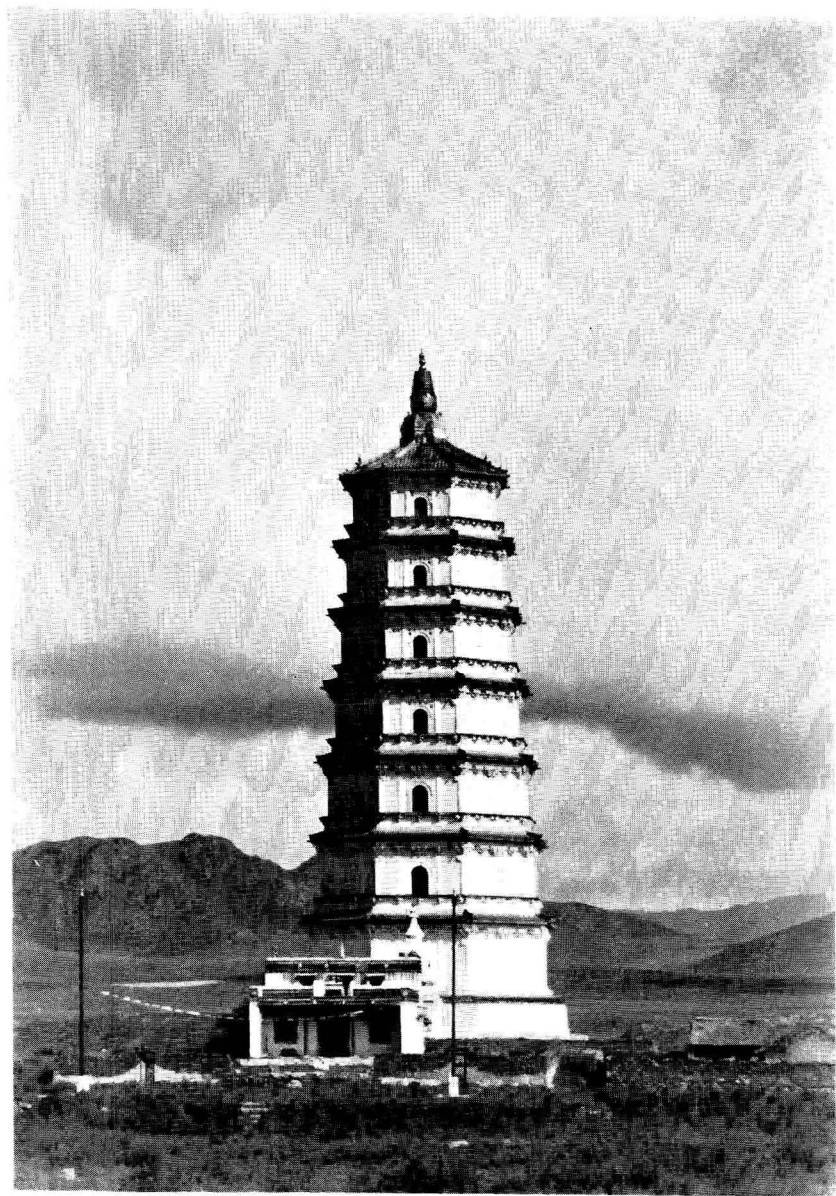
著
者
諒
承

1957年9月1日印刷
1957年9月5日発行

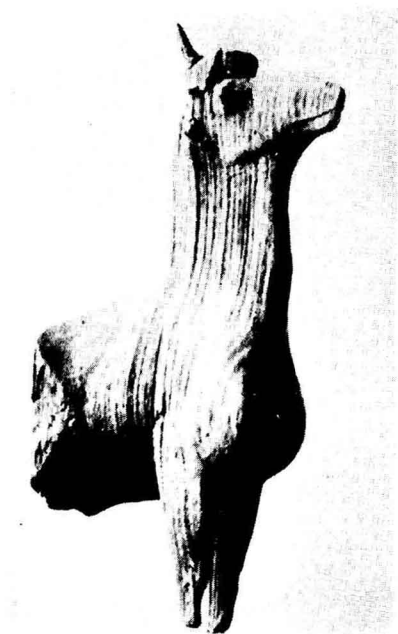
定価360円

監修者	田 村 実 造
	羽 田 明
発行者	岩 崎 徹 太
印刷	新興印刷製本株式会社
製本	株式会社 福島製本

発行所	東京 都千代田区	株式 会社	岩 崎 書 店
	神田神保町1丁目65		
	振替東京 96822		
	編集部	東京(29)3121-4	
	営業部	小石川(92)8095	



慶州城址に現存する遼代の仏塔
(パリン左旗 白塔子)



匈奴族の物質文化
 (外モンゴリアのノイン・ウラ古墳出土品)

上、木彫の鹿(紀元前後) 下 かみ合う動物の刺繍文



居庸關的過街塔雲台の南面（元代）

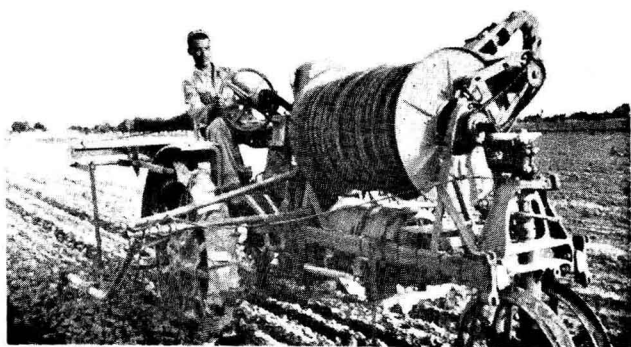


居庸關雲台の門洞東壁の持國天像
（元代の影刻）



チベットの首都ラサを出発する自動車隊

(新道路開通第一便 後方にみえるのはポタラ宮殿)



ウズベックの機械化農業

は し が き

よく「アジアは一つだ」といわれるが、歴史上からは、アジアは決して一つではない。周知のように、すでに先史時代から、中国文化圏・インド文化圏・西アジア文化圏および北アジア遊牧文化圏などに分かれて、それぞれ固有のすぐれた文化が形成されている。そして、これらの文化圏を基盤にそこに東アジア・南アジア・西アジア・北アジアの4つの歴史的世界が近代にいたるまで個別的に並存してきたのである。

このようなアジアの歴史的現実にもとづいて、この講座も全6巻のうち第1巻から第3巻までを中国を軸心とする東アジア史、第4巻を北アジア史（附チベット史、中央アジア史）、第5巻をインドおよび東南アジア史、第6巻を西アジア史と東西交通史とにあてることにした。最後の第6巻に収めた東西交通史は、アジアにおける4つの個別的歴史世界が、過去において、どのようなお互いの交渉をもってきたかを、まとめたかたちで考察したものである。

本講座の執筆者は、その大部分の人たちが、京都大学東洋史研究室出身の少壮学究であり、それらが、現に従事しつつある専門の時代なり分野なりを、それぞれ分担してもらった。しかし、そのため各巻・各章の論旨に一貫性を欠く弊におちいることを防ぐため、各巻ごとに責任編集者を設け、その人びとを中心に、いくたびかの討論をかさねたのち、はじめて執筆にあたるという方針をとった。

毎巻の責任編集者は、第1巻には河地重造（大阪市立大学助手）、第2巻には池田誠（立命館大学助教授）・岩見宏（神戸大学講師）、第3巻には北村敬直（大阪市立大学助教授）、第4巻には佐藤長（京都大学助教授）、第5巻には佐藤圭四郎（東北大学助教授）・藤原利一郎（京都女子大学助教授）、

第6巻には藤本勝次（関西大学講師）の諸君があたったが、こうしてまとめられた原稿を、さらにわれわれ両名が調整・監修した。したがって、もし本講座の内容上、不備な点や思わざる誤りを犯したところがあるとすれば、それは一に監修者の責任であることをおことわりするしだいである。

なお、この講座の特色について一言すると、つぎのような諸点があげられるであろう。

アジアの歴史を、その歴史的構造にしたがって、東アジア（中国史）・北アジア・南アジア（インド史・東南アジア史）・西アジアに分冊して敘述した。とくに中国史には最初の3冊をあて、近代・現代に重点をおくとともに、各時代にわたり最新の研究成果をとり入れることにした。

従来、講座形式のものは、執筆者が異なるごとに、各巻各章でその立場や論述にちぐはぐな点が多く、ままた読者を当惑させるような場合があったが、本書はこのような欠点にできるだけ注意をはらって、アジアの歴史発展をたやすく把握できるように努めた。

このため、政治・社会・経済を相關的に考察するとともに、それに並行して、学術・思想・宗教・文学、および美術・工芸などの文化的諸相を照応させつつ、それらの展開についても、できるだけくわしく述べることにした。本文中には、地図・さし絵・図表などを許すかぎり多く収め、また各巻末には年表・索引および重要史料・参考文献をかかげ、史料・参考文献には、良心的な解説を附して読者の理解に資することにした。

最後に、本講座の刊行については、岩崎書店編集部の方がたに、一方ならぬお世話になったことを感謝したい。

1955年5月

京都大学東洋史研究室

田 村 実 造

羽 田 明

アジア史講座 第4巻 目次

は し が き

北 ア ジ ア 史

序	説	1
	北アジア文化圏と歴史的世界の形成	北アジア文化圏
	北アジアにおける歴史的世界	
	北アジア世界における国家の類型と発展	遊牧国家の 類型 征服王朝の類型 遊牧王国から征服王朝への発展
第1章	先史時代の北アジア	10
	北アジアの石器時代	マンチュリア、モンゴリアの旧石 器時代 マンチュリアの新石器時代 モンゴリアの新石 器時代 マンチュリアの金石併用時代
第2章	古代遊牧国家の時代	16
1	北アジアの青銅器時代とスキタイ人	16
	スキタイ人とスキタイ王国	スキタイ文化と東方への影響
2	フン王国の成立と発展	17
	フン勃興前のモンゴリア	フン王国の成立 北アジアに おける歴史的世界の成立 フン王国の発展
3	フンの統治形態とその社会	22
	ゼンウ	貴族階級と統治形態
4	オルドス青銅器文化	24
	オルドス青銅器文化の特色	オルドス文化とスキタイ・シベ

リア文化 オルドス青銅器とフンの発展

- 5 フンの衰弱と分裂……………27
漢の武帝のフン経略 フンの衰弱 フンの分裂——東フン
と西フン
- 6 フンの復興とその文化……………31
フンの復興と呼韓邪ゼンウ I 世 ノイン・ウラの出土品から
みたフンの文化
- 7 南フンについて……………34
フンの再分裂——南フンと北フン 北フンのゆくえ 南フンのゆくえ
- 8 ウガン族・センビ族の発展……………36
ウガン族について 前漢・後漢初期のウガン族 後漢・
三国時代のウガン族 ウガン族の社会生活
センビ族について センビ族のモンゴリア制圧 檀石
槐とセンビ遊牧王国 軻比能
ボヨウ部とタクバツ部 ボヨウ部 燕（前燕）王国の
成立・発展 前燕国の滅亡 タクバツ部
- 9 柔然族の勃興と衰亡……………48
ジュウゼンのおこり
- 10 トルコ王国の勃興と衰亡……………52
トルコの勃興と国家機構 トルコ王国の勃興 トルコ
の国家機構 トルコ王国の内紛
東・西トルコの隆盛と衰亡 西トルコについて 東ト
ルコの崩壊 西トルコの滅亡 東トルコの再興と滅亡
- 11 ウイグル王国の興亡……………61
勃興期のウイグル部 ウイグル部について ウイグル

部のおこり 隆盛期のウイグル 衰亡期のウイグル 分
散後のウイグル

第3章 征服王朝の時代70

1 契丹族と遼朝70

遼代政治史 キタイ族の勃興とヤリツ・アボキ 遼朝の
成立と中国 遼朝の極盛期 遼朝の滅亡と西遼王国
遼代の社会と経済 遼朝治下の社会 帳族と部族
農耕民の州県制 遼朝の経済 商業貿易と交通経済の発展
遼代の制度と文化 遼朝の官制 遼代の絵画・彫刻・
陶磁器 遼代の建築 文字と民族意識

2 女真族と金朝84

ジュルチン族勃興前のマンチュリア——渤海国——
金代政治史 ジュルチンの勃興とワンヤン・アクタ 金
朝の中国征服
金朝の社会と経済 金朝の猛安・謀克制 ジュルチン
人と漢人の社会的相剋 金朝の経済 金朝の行政と司法
金朝の絵画と工芸 金朝の建築

3 モンゴル族と元朝94

勃興期のモンゴル族とチンギス・カーン モンゴル部
の住地 12世紀のモンゴル部族 モンゴル部の勃興とチン
ギス・カーン モンゴル遊牧帝国の成立
チンギス・カーンの外国経略 林の民と西夏王国の征服
金国遠征 中央アジアの遠征 オゴタイ・カーン（太宗）
の功業 憲宗の内治と外征 元朝の成立 モンゴリアを
めぐる元朝と海都カーン 元代のモンゴリア

4	モンゴル帝国の社会と文化	113
	モンゴル族の社会 モンゴル帝国成立前のモンゴル族社会	
	モンゴル帝国の構造	
	モンゴル族の文化 モンゴル文字（ウイグル文字とパシパ文字）	
	諸国人の登用と東西文化の流伝 カラコルムと上都 居庸関の雲台	
	金・元治下のマンチュリア 金朝治下のマンチュリア	
	元朝治下のマンチュリア	
第4章	元朝崩壊後の北アジア	125
1	元朝のモンゴリア復帰	125
	民族の移動 明軍のモンゴリア遠征 モンゴリア復帰の失敗	
2	タタール部とオイラート部	127
	タタール部とオイラート部の抗争 タタール部の統一	
	タタール部・オイラート部の対立と成祖の遠征 ウリヤンカ三衛	
	オイラート部の興亡 オイラート部の統一 也先の功業	
	オイラートと明朝との関係 オイラート部の衰頹 長城の増築と九辺鎮	
	タタール部の再興 ダヤン・カーンの統一 ダヤン・カーンの功業 モンゴル社会の再編成 アルタンの中国侵入	
	アルタンの西征 馬市 モンゴル社会の変容 ラマ教の輸入 チャハル部の盛衰	
第5章	清代の北アジア	144

1	満洲族の勃興と清朝の建国	144
	明朝治下のマンチュリア 満洲族の勃興——ヌルハチのマン チュリア統一 太宗の功業と内治 八旗制の成立 清朝 の中国征服	
2	清朝とモンゴル族との関係	148
	清朝と外モンゴル諸部 清代モンゴリアの行政区分——旗と 盟 清代モンゴルの兵制 ラマ教に対する保護 ロシア 勢力のモンゴリア進出と清朝の植民実辺策	
3	清朝治下のマンチュリア	157
	清朝のマンチュリア封禁 ロシアのマンチュリア侵略と日露 戦争	
第6章	北アジアの近代化	161
	ロシア勢力の進出と外モンゴリアの独立 内モンゴリアの自 治運動 清末・民国初のマンチュリアと張作霖 満洲事変 と満洲国	

チベットの歴史

序	説	166
	地勢とその区分 住民 チベットの名称	
1	古代統一王国とその崩壊後の状態	168
	古代チベット王国＝吐蕃 吐蕃の勃興 吐蕃の全 盛期 吐蕃の衰亡 吐蕃の文化 分裂時代の諸教団 アテシヤとその系統 マルバとそ の系統 サキャパと元朝 各派の勢力と明朝 ゲルグパの発展 ツォンカパの出現 ツォンカパの弟子	

たち 初期のダライ、パンチェン両ラマ

2 法王国の成立とその推移178

ダライ法王国の成立 第5代ダライの時代 清朝のチベ

ット工作 清朝の宗主権設定 中国、チベットの経済関係

チベットとイギリスとの関係 イギリスのパンチェンラ

マへの働きかけ グルカ族のタシルンポ掠奪 シッキム問

題 ロシアのダライへの働きかけ ヤングハズバンドの遠

征 ダライの親英政策への転換

チベットの現状 チベットの独立運動 ダライ、パンチ

ェンの対立 チベット・中国の新しい結合

中央アジアの歴史

序 説192

中央アジアの風土 中央アジアの範囲 オアシス住民の

生態 「絹の路」

中央アジアの民族 古代の住民 中央アジアのトルコ化

1 アーリア時代197

オアシス国家の繁栄 タリム盆地の諸国 トランスオキ

ジアナの諸国

遊牧民族の動向 遊牧民族とタリム盆地地方 遊牧民族

とトランスオキジアナ

中国との関係 西域経営 高昌王国

イランとの関係 政治的関係 文化的関係 トランス

オキジアナのイスラム化

2 トルコ＝モンゴル時代前期204

ウイグル族の移住 西ウイグル王国 カラ＝ハーン王国
 カラ＝キタイ王国 モンゴル族とウイグル人 モンゴル族
 の征服 チャガタイ＝ハーン国の盛衰 ティムール帝国
 ティムールの子孫

3 トルコ＝モンゴル時代後期210

16世紀以後の中央アジア 中央アジアの没落 東チャ
 ガタイ＝ハーン国 「神聖国家」ホジャ政権 清朝支配下
 の東トルキスタン 反乱の頻発 新疆の大反乱

4 近 代213

ロシアの中央アジア経営 ロシアの西トルキスタン征服
 ロシア支配下の西トルキスタン 赤色革命後の中央アジア
 現在の中央アジア

参 考 文 献 目 録219

索 引

序 説

本講座第1巻の序説でもいったように、北アジア世界は東アジア世界の北方に隣接する地区である。北アジア世界を地域上からみれば、モンゴリアを中心に、東は興安嶺をへだてて^{マンチュリア}満洲をふくみ、西はアルタイ山脈をへだててズンガリアに接し、さらに中央アジアのステップ地帯が遠く南ロシアまで連なる。この地帯は雨量がすくなく、大半は草原で、その間に沙漠が散在するため、住民は遊牧生活を営み、古来いくたの遊牧国家が興亡した（第1巻1図ユーラシア大陸図参照）。

北アジア文化圏と歴史的世界の形成

北アジア文化圏 いま中国を中心とする東アジア世界と、モンゴリアを中心とする北アジア世界とを対照してみると、両世界は南北に相隣りしてはいるが、それぞれの地域性に応じて、そこに住む民族の生活様式は、前者が農耕生活であるのに対し、後者は遊牧ないし狩猟生活というように全く異なっている。したがって両者は、社会・風俗・習慣・言語・宗教・思想その他あらゆる点で本質的相違がある。かれらは、それぞれ異なる世界を構成する民族であり、東アジアと北アジアとは、地理的にも歴史的にも別個の世界であるといわねばならない。

このように北アジアが、東アジアとは別個の特殊的世界を形成していることは、すでに先史時代から認められる。歴史時代に入っても、殷墟の甲骨文字をはじめ、周代の金石文や尚書^{しやうしやう}の^{ぼくぜい}牧誓篇、逸周書の王会篇、^{ぼく}穆天子伝、国語、史記などの古文獻には、北アジア民族として土方・苦方・東胡^こ・山戎^{じゆう}・大戎^{たいじゆう}（^{けんじゆう}玁狁）・鬼方^{きほう}など大小さまざまな部族名がみえる。東周